



編集後記 From Editor

団地の入り口横の砂場で遊ぶ

団地をこよなく愛する団地マニアとまではいかなくとも、今の中高年世代なら、団地という言葉に多かれ少なかれ懐かしさを感じるだろう。それは自分たちの心に残されている、かつての時代の風景につながっている。私の故郷、岡山県の小都市にも団地はあった。そのためか、地域の子どもの数は多く、小中学校には急ぎしらせのプレハブ校舎が増設された。私たちの学年の教室はいつもそこ。夏は暑く、冬は寒かった。時々連れだつて団地に行き、広場にある遊具や砂場のあたりで夕暮れまで遊び回った。5時頃になると、どこからか聞こえてきたチャイムの音。

もっと後になってからの思い出は、学生時代の引っ越しのバイト。その日の行き先が団地だと分かると、まず何階かが気になった。もちろん、エレベーターがないからで、5階から5階への引っ越しにあたると、一瞬目の前が真っ暗になった。どうやってこの部屋に入っていたのかと思うほどたくさんある大小の荷物。それを全部人力で降ろし、引っ越し先ではフウフウ言いながら運び上げた。30年近く前のことだが、当時の団地はまだその輝きを失っていなかった。

年月がたち、次第に住民の高齢化と建物の老朽化が顕著になってきた。人工的に一気につくったまちだから、矛盾点も一度に顕在化してくる。その団地を、これから持続可能なまちでどう再生していくべきか。

今号で、何人の方が指摘されているように、再生するべきものは、ハードだけでなく、住民の生活とコミュニティだ。周辺の地域に開かれ、若い世代にとって魅力があり、高齢者も暮らしやすいまちにしていこう。そこで子どもを育てたり、また仕事をしたりと、多様な人や世代が混合するまち。さらに地域の特質を生かしながら、新しい居住のかたちを探っていくこともできるだろう。これからは、それをどう具体化し総合的にマネジメントしていくのが問われてくる。その一方の主体は、住人自身でないとけない。

今回の取材等では、各地で熱意ある人たちが動き出している手応えを感じた。地域の問題を正面から見据え、展望を見いだしていこうとする人たち。何より、その地域を愛する気持ちこそがかけがいのないもの。団地だけにとどまらず、地域再生の新しいパラダイムが、そこから生まれてくることを期待したい。

—— 京 雅也

表紙写真 千里ニュータウンにある「ひがしまち街角広場」に集まった人々と、新千里東町付近の団地の風景(豊中市)
裏表紙写真 路上で井戸端会議/空き店舗を活用した「明舞まちづくり広場」(共に兵庫県・明舞団地)／団地に設けられた「コミュニティ・カフェサック」(東京都・高島平団地)

CEL 88号 特集 ■ 持続可能なハウジング “団地再生” 発行●平成21年3月19日 頒価1,000円(送料別途)

■発行 大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所 (CEL)
〒541-0046 大阪市中央区平野町4-1-2

■発行人 多木秀雄 Hideo Taki

■編集人 京 雅也 Masaya Kyo / 弘本由香里 Yukari Hiromoto

編集●関西ビジネスインフォメーション(株) 内 CEL編集室
〒530-0005 大阪市北区中之島3-2-18

住友中之島ビル7F TEL.06-4803-2307

印刷・製本●日本写真印刷株式会社

RESEARCH INSTITUTE FOR CULTURE, ENERGY AND LIFE © 2009 OSAKA GAS CO.,LTD.

禁無断転載複写

※本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも小社の見解を表すものではありません。

本誌・バックナンバーのコンテンツや当研究所の活動内容はインターネットホームページ [http://www.osakagas.co.jp/cel/] でご覧いただけます。

本誌に関するお問い合わせ、ならびにご購読申し込みや送付先変更等のご連絡は CEL編集室 Tel.06-4803-2307 Fax.06-4803-2210 cel@kbicom.net まで